



東京YMCA

2017 9 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 菅谷 淳
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

“幸せなら手をたたこう”

作詞者・木村利人さんが語る ～ 名曲誕生のストーリー ～



♪ 幸せなら手をたたこう
幸せなら手をたたこう
幸せな態度でしめそうよ
ほら みんなで手をたたこう

JASRAC 出170828064-01

このストーリーは昨年、NHKのBSスペシャルでドラマ化されました。写真は、撮影のため54年ぶりに訪れたルカオ小学校で子どもたちと歌う木村利人さん。

木村 利人 さん

早稲田大学名誉教授／東京YMCAアドバイザー。1934年生。早稲田大学法学部、大学院修了後タイ、ベトナム、スイス、アメリカで研究員・教授を務める。1987年早稲田大学で日本初のバイオエシックス（生命倫理）講座を開設。恵泉女学園大学学長（06～12）、日本生命倫理学会代表理事・会長などを歴任。

私は知らなかったんです。日本軍がフィリピンで虐殺や暴行など残虐行為をしたということ。戦時中私は、日本軍は欧米の植民地支配下にあるアジアの人たちを助

けに行っているとか教えられなかったから、まさか加害者だったとは思っていませんでした。私自身は疎開児童であり、東京大空襲で自宅を失い、食べ物もなく、親戚も原爆で死にました。出兵やシベリア抑留で死んだ親戚も大勢いたので、被害者としての日本人という意識はかりが頭

私には村の中を案内してもらいました。どこに行っても「日本人は子ども女性も関係なく、無抵抗な市民を虫けらのように殺戮した」という話を聞かされました。スパイと思われる人を集めて燃やしたという教会の跡地や、弾丸跡なども見ました。14年経っても人々の痛みや悲しみは和らぐこともなく、日本への恨みや憎しみが渦

巻いていました。そんな中で私は、市内のルカオ小学校を宿舎にして約1ヶ月間、現地の青年たちと一緒に生活しながら、農村援助のための土木作業をしました。トイレのなかった地域に簡易トイレを作り、運動場を整備してバスケットコートを作るなど、共に汗を流して働き、朝夕の礼拝で聖書を読んで祈り、話し合いました。

しばらく経った頃、ラルフ君という青年が私に言いました。「君が戦争でフィリピンの人を殺したわけじゃない。だからぼくたちが、日本人が来たら殺してやりたい程に思っていたのは間違いない」と。そして手をとって、「今日は君が新しい世代の日本人として、再び武器をとって戦わなように誓う出発点にしよう」と言って、戦争が人を狂わせること、戦争の残酷さを確認し、聖書を読み、お互いに涙を流しながら祈りました。その時に読んだ聖書が「詩篇」47章の「すべての民よ、手をたたこう」です。この体験が後の作詞につながりました。

ラルフ君はご家族全員を戦争で亡くした青年でした。にもかかわらず「神の名によって赦す」「私たちはキリストにあつて友だちだ」と言ってくれたのです。そのタガログ語の「タヨ アイ

フィリピン青年との交流から

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

マカイビガン カイクリスト」の言葉が、今も鮮やかに耳に残っています。この日、憲法を改正しようとする動きがありますが、憲法をつくったときの国民の情念、二度と戦争はしないと誓ったその固い決意を忘れてはならないと思います。私が中学生のときにならった文部省の『あたらしい憲法の話』には、「こんな戦争をして、日本の国はどんな利益があったでしょうか。何もありません。ただ、おそろしい、かなしいことが、たくさんおこっただけではありませんか」とはっきり書いてありました。この憲法は占領軍が作ったといわれますが、そうではない。前文にある「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利」や97条の「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」などに表れているように、多くの人の平和への願いからできたものです。

この日を境に、村人たちの私を見る目が変わりました。「この人は平和な未来を目指すためにここにいる」と認めてくれて、そして「態度に示して、親切にしてくれまし

た。家に招かれる、誕生日や結婚式に招かれる。さらに地元ラジオ番組にも、戦後初めての日本人として招かれました。ラジオでは、加害者である日本人として改めて、再び武器をとって戦わないうわい、日本には再軍備禁止、戦争放棄の新しい憲法ができたことを伝えました。これは全ルソン島で放送され、その

後各地のロータリークラブにも招かれて私は、平和憲法の話をしました。ところで今、憲法を改正しようとする動きがありますが、憲法をつくったときの国民の情念、二度と戦争はしないと誓ったその固い決意を忘れてはならないと思います。私が中学生のときにならった文部省の『あたらしい憲法の話』には、「こんな戦争をして、日本の国はどんな利益があったでしょうか。何もありません。ただ、おそろしい、かなしいことが、たくさんおこっただけではありませんか」とはっきり書いてありました。この憲法は占領軍が作ったといわれますが、そうではない。前文にある「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利」や97条の「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」などに表れているように、多くの人の平和への願いからできたものです。

帰国後私は、ラルフ君と読んだ「手をたたこう」の聖句と、「態度に示して」歓迎してくれたフィリピンの人たちの感謝をこめて作詞し、現地のルカオ小学校で子どもたちが歌っていたスベイン民謡のメロディーにのせて歌にしました。

当初は、早稲田奉仕団の活動などで子どもたちと歌っていたのですが、口コミで広がり、坂本九ちゃんも歌ったことからヒットし、さらに1964年の東京オリンピックでも歌われ、海外にも広まっていきました。

私は1970年から2年間、戦争中だったベトナムで教鞭をとりました。枯葉剤による被害もで、遺伝子戦争の危機を感じました。自己規制のメカニズムを欠いた科学技術と国家権力が結合すると悲惨な暴走が起こる。それを正しくコントロールする学問の必要を感じ、社会・経済・政治・文化・宗教・哲学といった枠を越えて、いのちを守る新しい学問「バイオエシックス（生命倫理学）」を作

りました。その後アメリカの研究者と共にこの問題を研究するなど、私はフィリピンの人たちの誓いを胸に約40年、いのちの尊厳に基づいた平和を目指して尽力してきました。

かつてのYMCA指導者ジョン・アール・モットは、数百万人の青年たちを世界平和のために結集していった功績から、ノーベル平和賞を受賞しました。ぜひモットを学び続け、「戦争・平和・いのち」を考え、これからも平和をつくる者としてのYMCA運動を展開して欲しいと思います。

を平和運動へと導き、国家間の相互理解を助ける力を発揮できるように願っています。

改めてブランディングを議論しなければならぬ」とは「価値」はその時代のニーズに合っていないければならず、また時代の進化に応じて変わらなければなりません。変わらぬ価値も必要ですが、もっと時代に合うYMCAの価値を社会にアピールしていきましょ

今年、Aでは今、ブランディングプロジェクトが進行中です。本紙6月号にもその重要な要素としてビジョ

（なりたい姿）、バリュー（価値）、パーソナリティ（個性）が挙げられました▼戦後すぐの頃、英会話が学べる、そして友だちもできるYMCAは魅力的でした。私も大

学で学生YMCAに入りました。オルガン演奏がうまい人、聖書講釈が優れている人。多くの出会いがありました。社会人になってからは都市YMCAの社交クラブに入会。今でもその頃の仲間とは付き合っています▼

当時のYMCAには、勉強会をするまでもなく「価値」が備わっていたのでしょ。また時代のニーズにも合致していたのでしょ。しかし今、

戦争・平和・いのちを考える

全国のYMCAでは今、ブランディングプロジェクトが進行中です。本紙6月号にもその重要な要素としてビジョ

（なりたい姿）、バリュー（価値）、パーソナリティ（個性）が挙げられました▼戦後すぐの頃、英会話が学べる、そして友だちもできるYMCAは魅力的でした。私も大

学で学生YMCAに入りました。オルガン演奏がうまい人、聖書講釈が優れている人。多くの出会いがありました。社会人になってからは都市YMCAの社交クラブに入会。今でもその頃の仲間とは付き合っています▼

当時のYMCAには、勉強会をするまでもなく「価値」が備わっていたのでしょ。また時代のニーズにも合致していたのでしょ。しかし今、

戦争・平和・いのちを考える

全国のYMCAでは今、ブランディングプロジェクトが進行中です。本紙6月号にもその重要な要素としてビジョ

（なりたい姿）、バリュー（価値）、パーソナリティ（個性）が挙げられました▼戦後すぐの頃、英会話が学べる、そして友だちもできるYMCAは魅力的でした。私も大

学で学生YMCAに入りました。オルガン演奏がうまい人、聖書講釈が優れている人。多くの出会いがありました。社会人になってからは都市YMCAの社交クラブに入会。今でもその頃の仲間とは付き合っています▼

赤三角

全国のYMCAでは今、ブランディングプロジェクトが進行中です。本紙6月号にもその重要な要素としてビジョ



50mフリーリレーで1位に輝いた選手たち

第41回となる「全国Y M C A少年少女水泳大会」が8月17、18日、千葉県国際総合水泳場で開

全国Y M C A少年少女水泳大会 日本代表選手も来場 プール1000年記念に

催され、全国23カ所のY M C Aから247人の子どもたちが参加しました。今年はY M C Aが日本初の室内温水プールを設立して100周年の記念大会であり、多数の来賓から祝辞をいただいて開会。元日本水泳連盟会長（現・知的障害者水泳連盟会長）の佐野和夫さん、元オリンピック選手松田丈志さん、フィン・スィミング日本代表選手池口貴雄さん、フィン・スィミング元日本代表選手尾形蘭さん。それぞれ激励の言葉をいただいたほか、デモンストレーションもあり、子どもたちにも良い記念になりました。

また特別イベントとして『松田丈志選手と泳ごう！』も開催。全国の選抜選手28人がリレーチームを組み、松田選手と対戦しました。東陽町の選手が泳いだチームはみごと松田選手に勝利し、松田丈志賞を受賞。競技の合間には「フィン・スィミング体験会」もあり、「楽しかった」「難しかった」「またやりたい」等感想が寄せられました。

今大会に東京Y M C Aからは、小2、高3の58人の選手が出場。特別練習会を重ねて準備した結果、自己ベストを更新したり、メダルを獲得するなど、それぞれに成果を挙げた。男子総合3位・女子総合2位・男女総合2位の結果を収め、1000年記念の刻印がされたメダルをもらうことができました。また、エキスパートクラスの臼井遼君は通算4回目の最優秀選手賞を受賞しました。

会場には1000年の歴史を綴ったパネルが展示され、先達が開拓してきた道を振り返ると共に、次の時代への新たな一歩を踏み出す大会となりました。子どもたちは、伝説と誇りを胸にため、早く次の「横浜Y M C Aジュニア&マスタース水泳大会」に向かって練習を開始しています。

（東陽町ウエルネスセンター 澤村奈緒）

"まかれた種"の意義を確認

立川Y M C AリーダーOB・OG会

76年に立川駅近くに開設され、95年に現在の西東京コミュニティーセンターに統合された「東京Y M C A立川センター」。障がい児の活動などを先駆的に開発したこのセンターで、当時ボランティアリーダーをしていたOB・OGが7月22日、約30年ぶりに集合。旧交を温めるとともに、当時の経験を振り返り、その意義や今後の可能性について語り合いました。



参加したリーダーOG・藤沢陽子さんに感想をいただきました。

リーダーOB・OG会は、粹なことに、元スタッフ・嶋田敦子さんが開設から関わる「食工房ゆいのもり」（精神障がい等の方が働くパン屋さん&カフェ／自立や就労をサポートする福祉施設）で開催されました。

当日は、元ボランティアやスタッフのほか運営に携わった方々も参加され、立川ランチ設立の経緯や、プログラムに対する思いなども伺いました。私が参加していたのは、知的障がいを抱える子どもたちとのキャンプやプログラムで、個性あふれるキャンパーたちが、自分の世界を広げてくれました。それは「わたしの目にあなたは値高く」という神さまのすべての人に対する眼差しがプログラムの背景にあったからだ、話を聴いて思いました。

自己紹介・近況報告では、参加者それぞれの30年が語られました。Y M C Aでの経験や出会いが今の生き方につながっている皆さんのお話に聞き入っているうちに、自分の番に（汗）。

学生時代に様々なボランティア活動、大学卒業後は青年海外協力隊、戻って数年は代理教員をし、現在の団体勤務に至っています。この団体に関わってから、性搾取や性差別、暴力などに苦しむ女性がとても多くいることを知りました。でもだからこそ、誰もが大切にされる社会を望む気持ちが強くなったような気がします。

「誰一人とり残さない」というのは、2015年に国連が掲げた全世界の「持続可能な開発目標」の合言葉ですが、Y M C Aも矯風会も、百年以上前の設立当初から目標としていたことではないでしょうか。

自分が携わってきた活動や仕事は脈略がないように思えたけれど、テーマは「共生」だったのかなと気づいたのは、OB・OG会の帰り道でした。

（公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会 幹事 藤沢 陽子）

5カ国90人の学生が考える ヒロシマ発 “平和”



広島Y M C Aが主催する「国際青少年平和セミナー」が8月4～8日、広島市内で開催され、5カ国から90人の学生が参加。平和記念式典への参列や、原爆ドームの見学、被爆体験の講話、ワークショップなどをおして、共に平和について考え、交流の時をもちました。

このセミナーは、「核兵器の恐ろしさを知ること」と「国際交流」の2つを目的に、39年間にわたって開催されています。開会式で広島Y M C A上久保昭二総主事は、「友だちこそが平和を生み出す原動力。戦いたくないと思うような友情や平和の文化を育んで欲しい」と挨拶。その願いのとおり、今年も貴重な学びと交流の機会となりました。東京Y M C Aからは、高等学院の生徒等7人が参加。感想の一部を紹介します。

■選んだ漢字は「分」

山岸 朔太郎

ワークショップで、平和をつくるために大切だと思うことを漢字一文字でどう表すか、グループで話し合っ選んだ。

「分」という漢字には「分かる」と「分かち合う」の2つの意味がある。「分かる」はお互いに相手のことを理解し合う。「分かち合う」はお互いの気持ちや考え方を共有し、その時間や空間を共有するという意味。英語でいうと「understanding」と「sharing」だと思うけど、「平和」になるために、それ以前に人間が他の人間と関係を作り、社会を形成する上で、この2つは必要不可欠だと思う。

「世界が平和になるために」って考えようとなると、どうしても大きなことを成し遂げなければと思ってしまいがちだけど、「目の前の人と仲良くなってみよう」って考えてみると、ハードルはだいぶ下がる気がする。そんな、自分たちでできる身近なことを一つ一つ積み重ねることが、一人ひとりができる平和のための行動だと思った。

■世界のみんなの平和のために

小笠原 樹里

被爆者の方のお話は、今まで知らなかったことだらけでびっくりした。核兵器の恐ろしさを、目や耳で感じて、なんで根絶するべきなのかを再認識した。私たちは、このことを次の世代や世界に伝える必要があると強く思ったし、自分にできることをしたいと思った。

ワークショップでは、グループのみんなの新鮮な意見がきけてとても楽しかった。人と意見をシェアすることは、人の考え方や他の文化を理解することにつながるんだなと感じた。人の数だけ考え方ががあるから、一人ひとりの意見を尊重することが人を思いやることなのかなと思った。

今回、本当に来てよかったと思う。8月6日の悲劇のこと、異文化のこと、世界のみんなの平和のために何が大切か、学ぶことがたくさんあって、濃密な4日間だった。

オール東京会員「夏まつり」 学生ボランティアが活躍



→冷ややっこを販売する留学生。アルバイト経験を活かして活躍した。

が、会場は例年と変わらず大賑わい。かき氷をはじめ、各模擬店にも、子どもコーナーにも行列ができました。

今年もまた、設営や販売のため、ウエルネスセンターを利用する学生や、にほんご学院留学生（写真）、清泉女子大学学生Y M C Aの皆さんなど大勢の若者たちが活躍しました。

おかげさまで益金は約60万円。地域の会員活動ほかY M C Aの公益活動のために用いさせていただきます。